悔恨の海

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悔恨の海

【Ｎコード】
Ｎ１４２３Ｋ

【作者名】
藍村　泰

【あらすじ】
「傷を癒したくなんてない。これは、砂川さんからの贈り物だから」倉是由利（くらぜゆり）の痛々しい微笑みは、俺の腹にナイフを抉り込ませた。

「お兄ちゃん」
倉是由利（くらぜゆり）は俺のことをそう呼んでいる。遡（さかのぼ）れば数ヵ月前、初めてサシで飲んだ時だっただろうか。倉是ははにかんだ笑みで俺のことを年の離れた兄のようだと宣ったのだ。まあ、実際十三も年が離れているのでしょうがないかとは思ったものの、悪い気はしなかった。
倉是とは、同じ仕事場で働いている、云わば先輩後輩のような関係にあった。担当している仕事内容が違うため、俺は外の仕事が多く、あいつは中の仕事が多かった。あいつはよく働く。まだそこまで仲良くない時も、倉是の評判は耳にしていた。やれ、一ヶ月に一日しか休んでないだの、やれ、先輩の仕事まで肩代わりしてるだの、噂は尽きなかった。愛想がいいのが災いして、勘違い野郎に言い寄られている姿を目撃したこともある。
よくよく考えてみると、仲良くなった切っ掛けが思い出せない。ごく自然に、倉是は俺の中に滑り込んでいた。あいつには人を解きほぐす力がある。いくら表面上で接しようとしていた者でも、心を開けてしまうのだ。あいつ自身が心を開けっ広げにし過ぎているのが主だった原因に違いない。少しは危機感を持てと何度も忠告した。倉是の長所は異性からすれば諸刃の剣だ。もう、
季節は巡り巡り、夏が過ぎ、もうすぐ十月となる。
短い季節の間に、倉是は三度恋人を変えた。俺からしてみれば、初めの奴と次の奴は論外であり、語るも刀の錆びのようなみみっちい奴だった。だが、今回の彼氏は違う。俺が倉是の背中を後押ししたのだ。あいつに辛い想いしかさせない奴らよりずっとマシな男だと思ったし、それは周囲も納得していた。最初は気乗りしていなかった倉是だったが、彼と話していて気が合ったのだろう。キラキラした瞳で付き合うことになったと報告してきた。
「砂川（さがわ）さんってお兄ちゃんが言ってたとおり、めちゃめちゃいい人

！　ありがとね、お兄ちゃんがアドバイスしてくれなかったら、砂川さんのこと深く知ろうともしなかった」
　くしゃっとした笑い顔は俺の心を洗ってくれる。穢れを知らない純粋さが、こいつを幸せにしてやりたいと思う要因だった。胸の奥に覚えた鈍い痛みは、妹が兄離れする時のそれだと懸命に自分へ言い聞かせるより他なかった。
　砂川君なら倉是を傷つけない。ひねくれているが、不器用ながら優しさは持っているから。確信していた。
　――――だから、目の縁に涙をいっぱい溜めて、それでもそれを溢すまいと耐えている倉是を見た時は、信じられなかった。
「おいおい、どうした」
　倉是と砂川君が付き合っていた三ヶ月間、俺は他の仕事を併せて行なっていたので殆んど職場に顔を出していなかったため、倉是の疲弊具合に気付いてやれなかった。久々に見た倉是は痩せ細っており、目の輝きも失せている。快活な様子で飛び跳ねるウサギみたいな倉是と似ても似つかない少女が目の前にいた。
「砂川さんとは別れた」
　短く、端的に放たれた言葉は悲哀をふんだんに含んでいる。左手の薬指につけていた指輪も、誕生日にもらったというネックレスもない。
　誠也（せいや）と呼んでいた砂川君のことを、“砂川さん”と呼ぶ時点で傷が深いことがすぐにわかる。
　周囲の人には昼休憩だと言って、倉是を会社から連れ出した。会社より程近い公園のベンチに座った時、ついに倉是は涙を零した。
「私には砂川さんは難し過ぎた。やっぱり、好きかどうかわからないって言われてね、辛くなって別れちゃったよ。砂川さん、他人を好きになる気持ちがわからないんだって。……もう少し、笑わせてあげたかったなあ」
　噛み締めるかのように一言一言呟く倉是の肩は細い。まだ二十になったばかりだというのに、どうしてこいつは人の幸せばかりを優

先しようとするのだろうか。
「救ってあげれなかった」
砂川君の心に闇があるのは俺にもわかっていた。だが、それは彼自身が乗り越えるハードルであるが故、砂川君がまさかそれを救う手伝いを倉是にさせるなんて予想外だった。彼を買い被り過ぎていたのかもしれない。
「気に病むな、それは砂川君が悪い。お前が気に病むことじゃない。泣いて泣いて別れを受け入れな」
言うが早いか、倉是はますます盛大に泣き始める。こういう時に限ってハンカチもティッシュもポケットに入っていない。カバンを漁ればファミレスで掠め取ったウェットティッシュがあった。それを差し出せば、倉是はありがとうと少しだけ笑った。
頭を軽く撫でてやれば、「お兄ちゃんがいてくれれば彼氏なんてもういらない」と何とも罪作りな鼻声発言が飛び出す。
俺は敢えて何も言わずに、公園の木々が遮る先を見つめた。海の蒼が見え隠れする。
「……あそこにね、指輪とネックレス投げたんだよ」
「マジで？　時々、お前はとんでもないことしでかすよな」
「始まったのがあそこだったから。砂浜歩く時に手を差し伸べてくれて、それで――」
楽しそうに過去の残像に縋りつく倉是は見てるこっちを悲しくさせた。俺はあまり終わった恋に執着しない方だから、こいつの気持ちはわかり兼ねる。
一頻り話し終わった後、ポツリと倉是は洩らした。
「砂川さんにとっては三年分の付き合いだったけど、私にとっては三日分の付き合いだった」
「……時の流れは人によってまちまちだもんなあ。ま、砂川君も頑張ったよ。恋愛なんて興味のない奴だったのに、彼なりにお前を大切にしてた」
普通だったら別れた相手を擁護すれば、女は喚(わめ)く。自分はこれほ

ど傷付いた、自分と彼の会話も知らないけせに、と。しかし、倉是は嬉しそうに頷く。
「うん、頑張ってくれてた。ある人から、最近砂川君明るくなったねって言われた時嬉しかった……。やっぱり人って変われるんだよね。変わったり歩み寄る努力なんてしたくないとか砂川さん言ってたけど、着実に人って変化していくんだよねっ？」
傷を抱えた人間の笑顔ほど眩しいものはない。いつも笑っている倉是の中にも闇はあり、過去がある。
「でもね……今度は、お互いが頑張り過ぎない恋愛がしたいな。こんな恋、一度きりで十分」
「時間が砂川君への想いを解決してくれる。傷は徐々に薄れていくさ」
俺の言葉に倉是は首を横に振った。
「傷を癒したくなんてない。これは、砂川さんからの贈り物だから」
倉是由利の痛々しい微笑みは、俺の腹にナイフを抉り込ませた。
倉是と砂川君がどんな恋愛をしたかは俺には知る術がない。どちらの味方につくとかも考えていない。
ただ、あまり良い終わりでないのは倉是の青い顔や、言葉の端々から伝わってくるから。
兄として、後悔している。
倉是を見ていると、心配で心配で、変な道に行かないよう手を差し伸べてやりたくなる。それは砂川君も同じだったろうに。そう、彼も俺と、同じだったのだ。
喪った後に、自分が手にしていた存在の大きさを知る。
砂川君もわかってしまったのだろうか。これ以上自分と一緒にいては倉是が前へ進めなくなると。優しい倉是、優しい砂川君。似すぎた二人は互いを蝕んだ。

今更、思い出してしまった。初めて二人で出掛けた場所。夜に溶ける海、砂は白。転んだ倉是を見て、俺は馬鹿だなと笑い飛ばし、

腕を引き上げた。照れ臭そうな少女に俺は言ったのだ。
「お前は妹みたいだから、何かあったら守ってやるよ」
もしも、あの時、と後悔しても遅い。俺は最早兄でしかない。横にいてやるしか出来ない。

今はただ祈るだけ。倉是が立ち直ってくれるよう。

今はただ守るだけ。倉是が二度と溺れないよう。

近くて遠い、あの場所（うみ）は終わりと始まりの記憶を漂わせている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1423k/

悔恨の海

2010年10月8日12時51分発行